

言葉が流行し、書や畫や陶器や玩具や音樂やを羅列するのが文化史のやうに考へらるゝ傾向があるが、此著は一切斯かる人間の持つ道具を振り棄て、了つてゐる。之も一つの見方である。唯もう少しこの時代に特有な社會事象を詳細に説明して欲しい。例へば部曲なるものは、この時代の貴族制度を領解するにも必要な要素であれば、更に立入つて其性質が究められてよいであらう。

卷頭に正誤表があるが其他にも二三目につく。由來弘文堂印刷所は支那學社から活字を寄贈されたりして、奇字異字を豊富に所有してゐるのはよいが、其爲に反つて誤植を多くするのは迷惑である。商を屢々商に作り、匈奴の匈を勾に作れるは、貧弱な印刷所ならばせずに済んだであらう。又弘文堂が活字に敏感で、新活字をいくらかも鑄造するのはよいが、過ぎたるは猶及ばざるがごとし。時には全然ない字までも造る癖がある。本書百十頁、暴虐の暴の字も、何もあんな六つヶしい活字にする必要はなかつたであらう。二五〇頁、皇太子が父帝を誅殺といふが如き語句も妥當でない。白璧の微瑕と雖も再版に際して訂正して欲しい。

東洋史學が更に進歩すべくして進歩せざるは良參考書を缺くが爲である。一部二十四史、何れの所より讀み始めんか、之常に初學者の嘆である。幸ひにして魏晉南北朝は、本書によりて一條の通路を開かれた。此種の企が更に専門家の手によつて他の時代にも及ばざれんことを希望して止まぬ。(宮崎)

(京都弘文堂發行、定價金五圓)

Foakes Jackson: Josephus and the Jews

猶太史家 Flavius Josephus の評傳及び彼の著作を通じて見た猶太史の概説で、The Religion and History of the Jews as explained by Flavius Josephus なる補題を附する。著者は紐育の The Union Theological Seminary の基督教神學の教授で、聖書神學或は舊新約時代史に關する著述少なからず、本書も、舊約時代史と新約時代史との間、横はる隙罅を繋ぐ殆んど唯一の現存文獻である Josephus の著書によつて、主として基督教の前表としての猶太教と猶太民族の歴史とを見んとするのである。

全卷を分つて五篇十六章とし、別に Appendix 五項がある。

第一篇は Life and Faith of F. J. で、Josephus の自叙傳を通じて、彼の生涯の中最も多くの興味を持たれる紀元六六年の叛亂に際しての彼の態度を詳述した第一章と、彼が Apion の猶太教攻撃に答へた護教的著述 Contra Apionem によつて彼の信仰を檢討した第二章を含む。第二篇 The Religion of the Jews は、The Temple, The Law, The Hope of Israel in Josephus. の三章より成り、如何に猶太人の信仰が形式主義的な神殿生活から離脱して、律法主義となり、其律法の精神が古きものより次第に新しきに置換へられたかを述べて、基督教發生の氣運にまで言及してゐる。第三篇 Independence of the Jews. はハスモ

ネア王家の勃興よりヘロテア王家の樹立に至る政治史、第四篇 The Roman Yoke はイェルザレム滅亡に至る迄の政治史、第五篇は After the Fall of Jerusalem とは題されてゐるが寧ろ、Josephus の作品そのもの、評論或は其史料の吟味であり、殊に第十六章は新約聖書との關係を論じ、特に聖ルカ福音書が其知識を Josephus に負うてゐるとの Krenkel の説を反駁して其然らざる事を主張してゐる。

全般的に見て、著者は Josephus に對する從來一般の偏見を努めて排して、穩健に歴史家としての彼の立場を理解せん事を求め、彼が今や文化世界の中から忘れ去られようとした猶太教の傳説及び律法を新時代の中に如何に生かし、如何に適應せしめんとしたかに就て、寧ろ同情を以て辯護してゐる。然し H. G. Wells 氏が『世界史大系』の中に Josephus を呼んで 'a maddeningly patriotic writer' と評したに駁して、Josephus が猶太の過去の歴史に對して抱いた關心と猶太の制度に對して捧げた讚美とのみを理由として、あの祖國と羅馬との乾坤一擲の戦役に奉公しなかつた彼を愛國者と呼ぶ事の謂れなきを擧げ、『Of the better side of Judaism, except in the reply to Apion', Josephus has little to say. At any rate, the last part of the 'Antiquities' is invaluable for the history of an obscure period of the history of Israel; but for all our gratitude due to Josephus for composing it, it is hard to feel admiration for the man himself. (p. 258)』とまで極言してゐる。惟ふにあの

矛盾に富んだ Josephus の眞相を判するに當つては著者自ら大いなる矛盾と當惑に直面した事と思はれる。史實を述ぶるに當つては Josephus の傳ふる所を可及的に其儘に容認してゐる様であるが從來年記上或は文獻學的に疑義を生んでゐる諸點に就ては概れ、conventional な通説を何等註記する事なしに採用してゐる。

引用された原文は、Loeb 版の Dr. Thackeray. の譯を用ひてゐるが、同版未刊の 'Antiquities' のみは著者自身の譯文と思はれ、二・三は William Whiston の『標準譯』を參照してゐる。(Society for Promoting Christian Knowledge; London, 1950. 發行) (水川)

● 東洋史上よ 日本上古史研究 一 (耶馬臺) 考
り見たる

橋本 増吉著

耶馬臺國の論争は明治大正を通じてわが邦史學界に於ける最も大きいもの、一つであつた。魏志倭人傳に見える二三の地名を我國古代のそのいづれに比定するかは魏志そのもの、立場からは寧ろ比較的些末の事であるにか、はらず、之をわが國古代の實情を記すものとして記紀の所傳に立優つてその價值を認めようとするとき、その所謂耶馬臺國が果して今の九州の地にあつたか、將た畿内にあつたかの判定は實にわが國古代史の全貌を殆ど根柢から相違せしめるほどの大問題となるのである。さればこの論争に際しては國史、東洋史、考古學その他關係の學問に亘つて著名の學者は大方之に關係して各その見る所を發